

東日本大震災に思うこと

川嶋 舟

本会理事/東京農業大学 講師

平成23年3月11日に起こった東日本大震災は、相馬野馬追の執り行なわれる相馬もその被害を受けた。相馬で津波の大きな被害を受けたところにも馬が飼育されており、多くの馬たちもその犠牲となった。

震災の翌日以降、相馬市内外において津波の被害にあった馬たちの救出も行なった。水も引かず胸近くまで水につかった馬たちは、脚を中心に細かな傷があったものの助けられることをわかっているのか、逃げようともせずじっとしている。助け出すことのできた馬は、背中まで水につかった跡があった。ただ、私たちが救出できたのは、ごく一部であった。その後、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、南相馬市の多くの部分が避難地域となり、そこには多くの動物たちが取り残されてしまった。飼主の方々も多くは、苦渋の思いで動物たちを現地に残し避難せざるを得なかった。震災後比較的早い段階で多くの被災地では津波によって運ばれた瓦礫等は撤去されたが、避難地域となってしまったところでは、瓦礫の撤去も進まず、

動物たちの取り残された場所まで行きつけないところもあった。その後関係機関の協力で、多くの動物たちが救出されることになったが、時間がかかったこともあり、残念な結果となってしまった個体も少なくない。また、家畜は助けることができないまま殺処分とする方向で話が進められている。

動物とともに生活しているものにとって、生きて動物を助けることのできなかったことは表現しようもない苦しみである。地震と津波で生きながら得た動物たちを、原発事故という要素が加わったことによりその命を救うことができないその苦しみはどのように表現をすればいいのかわからない言葉が思い浮かばない。二度とこのような耐え難い苦しみを経験ことのない世の中となることを切に願っている。

現地は、前向きに進み始めている。その中で、相馬で飼われている馬たちも被災者の心をなごませる大きな役割を担い始めた。はからずも、震災において馬をはじめとする動物の担える役割を相馬で模索できはじめていることは嬉しいことである。

私は、家族と所有する馬の待つ相馬に週末戻る途中被災し、その後の様々な対応をすることとなった。被災直後で多くのことがまだ流動的に動く状況の中、現時点における私個人の感じたこと、そして思いを表現する機会をいただいたことに深く感謝し筆をおくことにする。



日本治療的乗馬協会

2011. Jun. 20. Vol.7

http://jtranet.jp

JTRA Newsletter

Japan Therapeutic Riding Association

編集・発行：特定非営利活動法人 日本治療的乗馬協会 〒161-0031 東京都新宿区西落合2-6-6 Tel.03-3565-6641

治療的乗馬研究集会 2011

大会テーマ

「豊かな生活の質に寄与する馬ースポーツとレクリエーションに焦点をあててー」

趣旨：障害のある人々の乗馬は、生活の質を高め社会参加を促す活動としてイギリスを中心に「障害者乗馬(Riding for the Disabled)」と呼ばれ、広く世界に普及してきました。

1980年代以降、わが国においても各地で様々な組織や団体によって活動が提供されています。近年は、医療や教育における「効果」を期待した取り組みや研究が活発に行われ、その成果が公表されつつあります。

これまで、本研究集会もそのような観点から大会テーマを設定してきました。

一方、2001年にWHO(国際保健機関)が示した「国際生活機能分類」以来、「障害」概念は大きく変わりつつあり、この理念を共有する「国際連合 障害者の権利条約」の批准に向け、現在、わが国も「障害者施策」の根本的な見直し作業を行っています。

以上のような認識に立ち、今大会は、スポーツやレクリエーションとして乗馬をすること、馬とふれあうことが、障害のある人々の生活の質を豊かにすることにどのように寄与しうるのかをテーマに、記念シンポジウム、実践・研究の発表と協議の機会をもちたいと思います。

今大会は、20年来障害のある人々のスポーツとしての乗馬に焦点をあて取り組みを続けている「日本障害者乗馬協会」との共催によって開催いたします。皆様の実践・研究のご発表そしてご参加を心からお待ちいたします。

期 間：2011年11月5日(土)・6日(日)
場 所：オリンピック記念青少年総合センター
センター棟 311号室
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

主 催：NPO法人日本治療的乗馬協会
共 催：一般社団法人日本障害者乗馬協会

参加費：2日間 会員 5,000円
一般 7,000円 学生 3,000円
1日間 会員 3,000円
(5・6日のどちらか) 一般 4,000円 学生 2,000円

*会費には資料代、情報交換と懇親の会費を含みます。
*会員は日本治療的乗馬協会、日本障害者乗馬協会の会員
*事前登録のない当日参加は、1,000円が参加費に加算されます。
●参加、実践・研究発表の申込み方法、両日のスケジュールについては本協会ホームページ(<http://jtranet.jp>)をご覧ください。

大会テーマ：豊かな生活の質に寄与する馬ースポーツとレクリエーションに焦点をあててー
日 程：11月5日(土) 13:00 受付
13:30~16:30 シンポジウム

パネリスト：渡辺廣人(日本障害者乗馬協会会長)
三木則夫(日本障害者乗馬協会理事 2010世界選手権(パラ馬術)日本チーム監督)
浅川信正(2010世界選手権(パラ馬術)日本代表選手・静岡乗馬クラブ)
高田華羊(2010世界選手権(パラ馬術)日本代表選手・東京乗馬倶楽部)
鎮守美奈(2010世界選手権(パラ馬術)日本代表選手・明石乗馬協会)
司会：柳迫康夫(JTRA理事 東京農業大学)

17:00~ 情報交換と懇親の会
11月6日(日) 8:30 受付
9:00~16:30 実践・研究報告と協議
●実践・研究の口頭発表を募集いたします。

市販直後調査

平成22年12月~平成23年6月

新発売

ヒアルロン酸ナトリウム架橋体製剤

薬価基準収載

サイビスクディスポ[®] 関節注2mL

SYNVISC[®] 2mL ヒアルロン酸ナトリウム架橋処理ポリマー及び
ヒアルロン酸ナトリウム架橋処理ポリマーヒニルスルホン架橋体関節内注射剤
処方せん医薬品(注意一医師等の処方せんにより使用すること)



■「効能・効果」「用法・用量」
「用法・用量に関連する使用上の注意」
「禁忌を含む使用上の注意」については、
製品添付文書をご参照ください。

販売
TEIJIN 帝人ファーマ株式会社

〒100-8585 東京都千代田区豊が岡3丁目2番1号
資料請求先：帝人ファーマ(株) 学術情報部

genzyme

製造販売元
ジェンザイム・ジャパン株式会社

〒107-6337 東京都港区赤坂五丁目3番1号
<http://www.genzyme.co.jp/>

Synvisc及びサイビスクディスポはGenzyme Corporationの登録商標です。 ©Genzyme Japan K.K.2010

SYV013(LT)1012 2010年12月作成

【編集後記】

地震、津波、原子力発電所崩壊による放射能汚染と、大変な事態が起きました。収束には未だ見通しがたちません。この事態は、日本人にとってだけでなく、私たち人類一人ひとりすべてにとって遭遇しているものだと思います。そのように考えると「がんばれ」も「お見舞い申し上げます」も言えない気がします。新しい日本を、新しい文明をここから創るスタートラインに私たち全員は立っています。

さて、今回から連載が始まります。埼玉県立深谷はばたき特別支援学校のポニー飼育の様子を伝える通信です。こちらは、ニュースレター発行後インターネットのホームページでもご覧いただく事ができます。どうぞお楽しみに。(滝坂信一/本会理事)

ポニーのいる学校(1)



埼玉県立深谷はばたき特別支援学校 教諭

小松 文



埼玉県立深谷はばたき特別支援学校 (<http://www.habataki-sh.spec.ed.jp/>)は、児童生徒数185名、今年の4月に開校したばかりの埼玉県北部に位置する環境に恵まれた新しい学校です。4月の初めには、学校の横を流れる荒川に北へ帰る途中の羽を休める白鳥がたくさん見られました。北の方角には赤城山、南には秩父連山を望み四季折々の風景を楽しめそうです。

給食室の窓からは遊具広場と木立が見え、その木立の間を悠々と歩くポニーがいます。北海道生まれの長野育ち、名前はメロンという145cmもある大きな女の子です。5月20日に彼女は5歳の誕生日を迎えました。誕生日には段ボール4箱分のニンジンで児童の御家庭からプレゼントされたり、「ハッピーバースディ」を歌ってもらったりしました。



後から知ったことですが、新校開設準備室が、動物とのふれあいに より得られる教育的効果や学校の立地条件等を踏まえてポニーを契約したのと、私が昨年治療的乗馬研究会で長野県の伊那小学校の事例を羨ましがっていたのは、ほぼ同時期でした。(奇蹟的！)



着任してすぐにメロンの世話を一緒にしてくれる仲間ができました。乗馬経験もなくもちろん世話をしたことのない方々ですが、今ではメロンに乗って引き馬で校庭を散歩しています。メロン専用のブラシも頭絡も鞍もまだない状態で初めての乗馬が裸馬という過酷な体験をしているわけです。今は事務長が土日にも必ず出勤してメロンの世話をしてくれていますが、今後はこの仲間と楽しく土日や長期休業を乗り越えていこうと考えています。

高等部木工班の作業で出たおがくずはメロンのベッドになっています。メロンのボロは農園芸班の畑の肥料になります。もう少し作業が軌道に乗ってきたらメロンの飼料も栽培してもらえそうです。子どもたちには動物をいたわる優しさや責任感、メロンには学校の一員となって子どもたちの良きパートナーとしての役割を、それぞれ育んで欲しいと考えています。

メロンと子どもたちとの直接のふれあいはまだ始まっていません。メロンが新しい環境に、そして教員たちがメロンにすっかり慣れてから始めたいと考えています。でも、そうっと会いに行っている子どもたちもいます。「いつ乗せてくれるの?」「にんじんあげてもいい?」メロンのことを子どもたちはいつも気にしながら、もっと仲良くなれる日を待っています。

私たちはメロンに対する愛情と情熱しか持たない素人集団です。そのため、たくさんの方々の応援が必要です。どうぞメロンに会いに来て私たちにアドバイスを下さい。

よろしくお願いします。

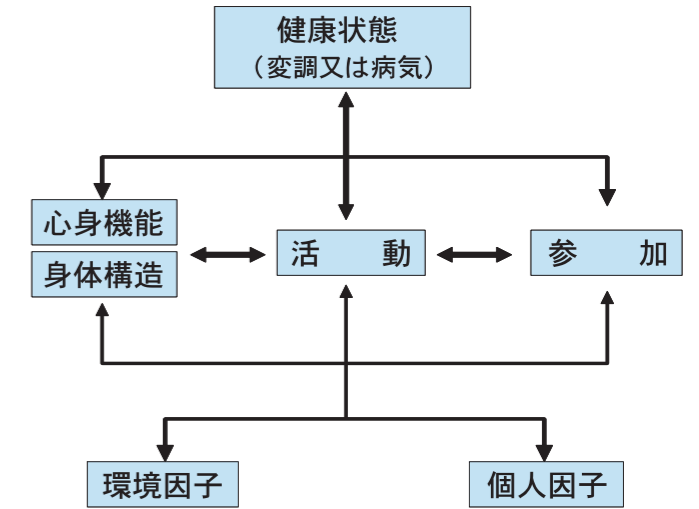


ICF(国際生活機能分類)から「障害」と乗馬、そして私たちの生活を考える

長野県伊那養護学校 教諭
伊藤尚志

ICF(国際生活機能分類)は、2001年にWHO(世界保健機関)が提唱した<International Classification of Functioning, Disability and Health>の略称です。ICFは、人間の生活機能と障害に関する状況を記述することを目的とした分類であり、健康状態・心身機能・身体構造・活動と参加・環境因子・個人因子から構成されます(図1)。このようなモデル図がどう私たちの生活と関わっていくのでしょうか。一例を挙げて考えてみたいと思います(図2)。

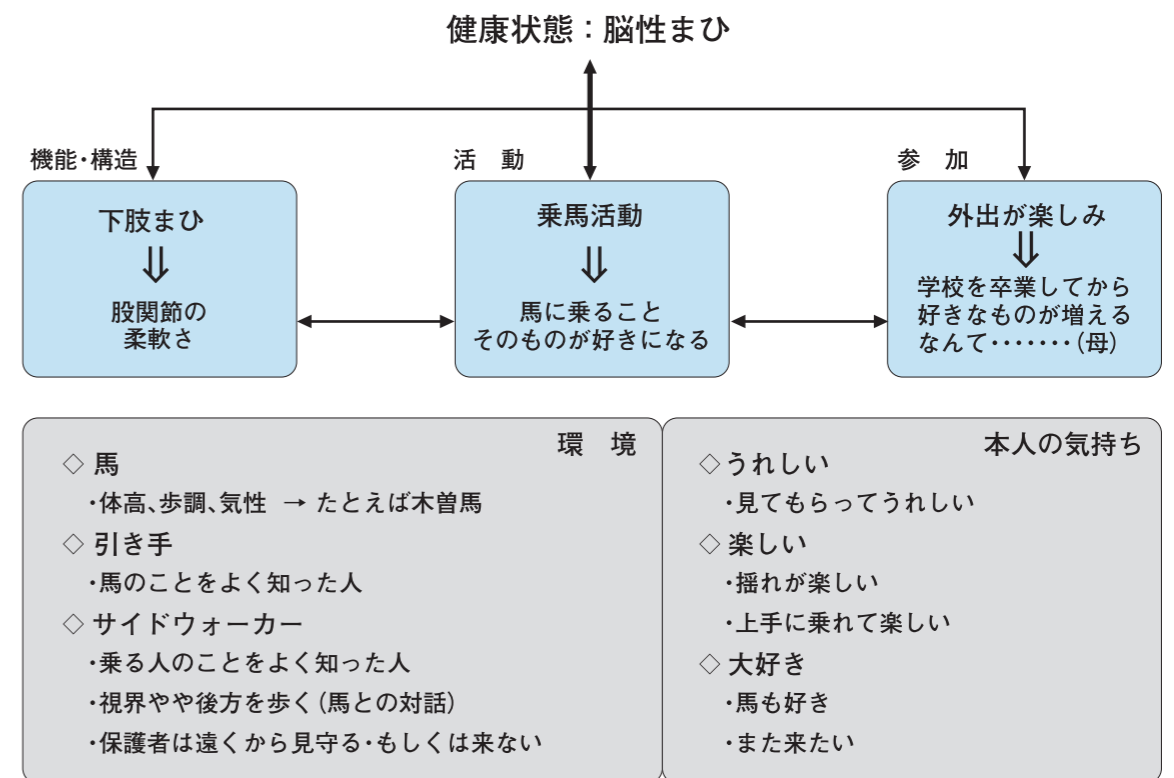
脳性まひにより股関節に垂脱臼のあるMさんは、車いすで移動する生活で、股関節も広がりやすく乗馬はできないだろうと考えられていました。それでも学校卒業後の生活の充実を目指して、休日に行われている療育乗馬へ参加してみることにしました。Mさんの体に障害はあっても、Mさんが乗馬活動を楽しめるように療育乗馬のスタッフは考えました。体高が低く馬上で感じる揺れの穏やかな木曾馬に乗ったらどうだろう。馬がゆっくり歩めるようにコントロールできるインストラクターが馬を引き、両サイドに落下を防ぐためにサイドウォーカーをつけたらどうだろう。サイドウォーカー



<図1 ICFモデル図>

はMさんの体のことや気持ちがお母さん以外の人をつけるのがいいだろう。などなど、環境を整え乗馬活動を続けました。すると、Mさんは馬に乗ることそのものが好きになり、気がつくと乗馬するときの股関節が柔らかくなっていました。今では休日に療育乗馬に出かけるのが楽しみになっています。

この事例では、まず参加してみよう、そしてMさんのできる活動、それを制約している障害を環境を整えたり本人の気持ちに配慮することで軽減していこう、そう考えたことでMさんの生活は豊かになっていきました。このようにICFの考え方を生かしていくことは、特別に新しいことではなく、また障害のあるMさんの生活だけに言えることではなく、健全といわれる一見障害のない人の生活の向上にも役立つものであると考えられます。



<図2 ICFの考え方を活用した療育乗馬>